

昭和東南海地震(1944)による静岡県西部の軍需工場の被害

青島晃*(磐田南高校)・土屋光永(浜松市在住)・野嶋宏二(浜松市在住)・松井孝友(磐田市在住)

§1. はじめに

東南海地震は1944年に発生したマグニチュード7.9の大地震である。しかし、当時は戦争中であったために報道管制が敷かれており、被害の実態については不明な点が多い。戦後、大庭(1957)によって静岡県西部地域の家屋被害の統計と地盤との関係についてまとめられたが、工場被害については明らかにされなかった。

筆者らは、東南海地震による静岡県西部地域の被害や地盤との関係について研究をすすめてきた。これらの資料を収集整理している過程で、多くの工場被害を記録した文書や写真を発見した。これらは、いずれも浜松市を中心とした軍需工場のものであった。青島(1995)は、特に軍需工場の被害に着目して、今まで整理されていなかった統計や資料をまとめた。その後、調査地域を拡大して、再調査を行ったところ、新たな資料が発見されたので、本論では、浜松市を含めた静岡県西部地域全体の軍需工場の被害を報告する。

§2. 調査方法

主に静岡県西部地方の公立図書館や役所に保管されている保存文書をもとに調べた。特に浜松市中央図書館に保管されていた「震災被害状況書類」(浜松警察署, 1944)は当時の浜松警察署がとりまとめたもので、地震当日から約1カ月間の工場や学校などの被害の報告が克明に記録されており重要な資料となった。また、各事業所の社史や沿革史も参考にした。また、現在も存続している工場には、直接出向いて体験者に体験談を伺った。

§3. 被害の統計

地震当時、浜松市には工場は紡織、製材木工製造関係を中心に3,185箇所(昭和17年度統計による)あったが、いずれの工場も戦時中であったために、なんらかの形で飛行機や弾丸などの生産にかかわっていた。これらの工場の多くが地震によって倒壊した。浜松市周辺の推定震度は、家屋の倒壊率や被害状況から推定すると、およそ震度V弱～VI強であったと推定される。

当時の浜松警察署に報告のあった63工場の内、被害を受けた工場は59工場に及んだ。これらの被害状況は全壊棟数154棟、全壊坪数53,620坪、半壊棟数82棟、半壊坪数7,992坪、死者45名、重傷者79名、軽傷者153名、損害見積は当時の金額で29,429,200円以上である。特に大きな被害を受けた

浜松市内の工場は、小糸航空株式会社(森田町)、日東航空浜松製作所(森田町)、中島飛行機宮竹工場(宮竹町)、日本楽器天竜工場(飯田村)などである。しかし、被害報告を提出しなかった小さな工場まで含めると、実際にはこれ以上の被害があったと推定される。

§4. 被害の原因

浜松商工会議所(1971)によると、工場倒壊の原因について、当時の遠州機械株式会社の元取締役安田元三氏は次の3点を指摘した。

- ① 生産工場にはベルト掛けの機械が多く、天井に伝動用メインシャフトが通っており上部が重たかった。
- ② 当時日本は鉄鋼が不足しており、金属の供出により柱と棟を結ぶ補強鉄材が撤去された。なお、補強鉄材を残しておいた織機ショールームだけは倒れなかった。
- ③ 照明の関係から東西に長い工場が多く、南北の揺れに弱かったため、将棋倒しに倒れた。

上記のとおり、被害の原因は主に戦時下での物資不足による建築構造上の弱さである。

また、被害と地盤との関係は、被害が三方原台地のような洪積台地ではなく、ほとんど沖積平野である。特に大きな被害を受けた小糸航空株式会社(森田町)、日東航空浜松製作所(森田町)の地盤は、遠州灘に平行して並ぶ砂堤列間の低湿地の東に位置し、有機質層や泥炭層、シルトや粘土が厚く堆積している地域である。また、中島飛行機宮竹工場(宮竹町)の地盤は、水田の埋め立て地である。日本楽器天竜工場(飯田村)は、天竜川のつくる扇状地平野の旧河道に沿う後背湿地にたてられた工場である。いずれも上層に泥層が厚く堆積した軟弱地盤に工場が建てられていたために、地震動が増幅されたものと考えられる。さらに、中島飛行機宮竹工場(宮竹町)では付近の井戸から泥水が吹き出したという証言があり、液状化現象が発生したことが、被害を大きくした原因と予想される。

引用文献

- 青島晃, 1995, 東南海地震(1944)による浜松市を中心とした軍需工場の被害, 静岡地学, 71, 13-22.
浜松警察署, 1944, 震災被害状況書類.
浜松商工会議所, 1971, 遠州機械金属工場発展史, 1506p.
大庭正八, 1957, 1944年12月7日東南海地震に見られた遠州地方の家屋被害分布と地盤との関係, 地震研究所叢報, 35, 201-295.